

たことをつい昨日のようになつかしく思い出しております。

【執筆者の紹介】

岐阜県土岐市土岐津町高山八五の一、木村國一氏の長男として、大正三年三月十八日出生される。

昭和二年四月、土岐市泉尋常小学校卒業。

昭和六年四月、岐阜県立多治見工業学校卒業。

昭和十三年五月より父親の事業、陶磁器製造業を引き継ぎ、その後事業は急速な発展をして、会社組織として拡大の一途をたどる。

その間、娘三名を得て幸福の極みであった。

そのうち日本の戦局急を告げ、木村氏にも召集令状が届き出征される。

そのとき、奥さんの腹の中に、五か月の男児があった。内地で集結、渡満される。

昭和二十年八月十五日終戦、九月シベリア抑留。

昭和二十三年九月十九日復員、なつかしの郷里へ帰る。

昭和二十三年、推されて弱冠二十七歳で土岐津町会議員に当選。同年、土岐市合併と同時に土岐市議会議員、二期務められる。

その間、厚生委員長、建設委員長を歴任する。

昭和四十年、岐阜国体開催のとき、土岐市下石町の会場にて昭和天皇、皇后両陛下の先導役としてご案内され、一世一代の大仕事を無事に果たして大任を務めた。

その他、ローターの土岐市会長を務めるなど多くの公務を果たされた。現在、土岐津町高山老人会長を六年努めて皆さんに親しまれている。

(岐阜県 鈴木 善三)

月見草の花咲く丘

熊本県 徳 永 年 春

ナホト力よさようなら

乳色に流れる霧を押し分けて、銀色に輝く海のはと

りに汽車は停まった。故郷に帰る夢に胸をふくらませ、青く晴れてゆく高い空に広がるプラタナス、ポプラ、泥柳の葉、柔らかな風に白い葉の裏を返してサラサラと我らを迎えてくれた木々の緑、暖かい優しい匂いの潮風、幾年ぶりに砂浜に立って素足で歩いた一時、夕ナホトカの収容所での夢は、大きな船からおろされたボートから、人が乗って迎えに来る、大きな声で呼んでいる、おれの名前だ、近づいて見ると、兄さんだ、弟だ、オーイ、オーイ。

こちらも皆でボートを出してもらい、日本から来た船に乗るため岸を離れた。あれよ、あれよと思う間もなく兄も弟も波のあなたに消えてしまい、はっと我に返り、夢であつたのかとがっかりしたが、遠くの海に大きな姿の日本の船が錨をおろしているのが見られた。夢で聞いた汽笛の声音はこの船のものであつたのか。

自分たちを迎えに来てくれたと思つて胸躍らせていたのに、「高砂丸」と船腹に書かれた赤十字船は、我らに「上船命令」が出ることもなく、いつの日か「ナホトカ」の海から消えていた。

柔らかく広がるポプラ、プラタナス、泥柳、木陰より鳴き交わす松蟬の声、海から聞こえる波の音、空に舞い上がるカモメ、見上げる空には白いちぎれた綿雲が動くともなく流れて行く、ポプラの梢をゆすつて吹く浜風、暖かい故郷から吹いてくる南の風が我々を迎えに来たぞと肌をなぞつてゆく、うれしさに胸躍らせたのも束の間の夢となつて「上船命令」ならぬ「作業命令」が出された。

多くもない装具をまとめて、我々小隊百名ばかりはシベリア鉄道を北上する汽車に乗って当てもない旅に出發することになった。どこまで行くのか、どんな作業をさせられるのか、何の説明もありはしない。ただ不安と恐ろしさがつのるのみ、暗いナホトカの駅を後にする。

夢に見た兄や弟、姉や母、私のことをどんなにか故郷の家では心配しているのであるうかと思えば胸が切なく、折角ここまで来たのにいつ帰れるとも、どこへ行くとも、何も知らない旅の辛さに、皆ただ我慢のほぞをかむのであつた。

昭和二十三年六月一日未明ナホトカに着いた。六月十七日ごろまでナホトカの收容所に日本からの船の来るまでと待機させられておりながら、急に作業命令が出て、シベリアを北上する汽車の人となった。ナホトカに来るときうれしさに比べ、何とも表現できないくらい思いであったことか。ガタンゴトン、ガタンゴトン、大きな汽車のわだちの音が、空腹にしみ渡る。どんなに悔しくても悲しくてもソ連人の命には従わねばならぬ。ナホトカではあんなにはしゃいでいた戦友たちもみな黙りこくって暗い汽車の中で眠ってしまった。

どれほどの時間がたったのだろうか、目が覚めて見たら窓は明るくなって平原を走っている。

やがて汽車はとまり、下車とのこと。駅らしくもない大草原のただ中に全員降ろされて、歩くことになった。人家がところどころに建っていて牛や羊や馬の姿もたまには目につくけれども、全くの草原である。

装具を肩に負い、線路をまたぎ、道路に出る。人家の人たちも忙しそうに働いていた。しばらく行って道

端の広場で休憩して、昨日もらってきた黒パンで朝食を済ませた、といっても持ち合わせの水筒のお茶を飲み、それで終りである。背に負うた装具といっても重いほどの物は持つてはいないけれども、全員現地まで歩いて行くとのこと。現地とはどんなところか、どんなに遠いところか。初めは線路わきに人家もあり、人が見え、牛、馬、犬が見られ声も聞かれていたが、やがて車も汽車も人家も、人影も全く見えず、ただ見渡す限り草、草、草の中を、真っ直ぐに伸びた一本の道をただひたすらに歩くのみ。

一里歩いたけど果てはなく、二里、三里、五里、十里、どれほど歩いたとて同じところを歩いているように果てしなく遠い。梅雨明けの青い空からは太陽がカンカンに照りつける。暑いこと、したたり落ちる額の汗、重たくもない背囊も長途の道を歩くほどに肩に食い込んでぐしょぐしょに濡れてくる。風は涼しいはずなのに暑さは疲れと共にのつてきて大草原のただ中で小休止となる。広い原っぱには木もなければ川もない、ただ草と青い空だけ、草にはきれいな花が咲き、

姫アザミ、姫百合、カキツバタ、アヤメ、ケシ、ナデシコ、野菊、芍薬、日本の野草と余り変わったこともないけれども、春が来たぞと一べんに咲きこぼれるので、目には特にきれいに見えるものらしい。

朝の中は元気であった兵隊も、労働歌、赤旗の歌、シベリアの奥地で習い覚えた歌を数々歌っていたけれども、歌声も小さくなってきた。そんなときの小休止はうれしかったが、長く休んでいるわけにもゆかず、やがて強行軍が始まる。だんだん行くほどに暑さは暑し、肩は痛む、マメでもできたのか足が痛む。やがて日本人収容所に到着、やれやれと思いきや、我々の作業場は最も遠いところとか、しばし休憩してまた歩くことにする。

今考えてみれば、遠いなまこ型の一番先の小さい収容所から牧さんをトラックに乗せて連れてきて、牧さんの解剖をしていただいたのもこの収容所であった。現地の収容所までいかに遠かったことか。ここまでも遠かったのに、疲れた体に鞭打って歩くことになった。最早朝食べた黒パンのかけらも腹のどこに消えたのか、

腹もすいてきた。

陰のない原っぱに休憩してお昼の少ない黒パンをかじり、残り少ない水筒のお茶で喉を潤し、五体の休まる間もなく、道案内の「カマンシル」と「カンボーイ」と小隊長に連れられて午後の行軍が始まる。長い長い汽車の旅とナホトカの収容所暮らしで、それほど足を鍛えていなかった兵隊たち、おんぼろ靴である。汽車をおりや一気に何十里の強行軍、なんでたまらうや。

それでも少しばかりの黒パンを腹に入れて、水筒のお茶を飲みながらも、元気を取り戻した兵隊は炎天の焼けつく草原の一本道を黙々と歩いた。

やがて歩いて行くほどに、道幅は小さくなり両方の草丈は大きくなっていくことは、人通りが少ないということである。心細さ限りなし。

幾度か休憩したけれども、足が痛いやら、肩が痛いやら、マメはつぶれて血がにじむ。真上にあった太陽もいつしか西に傾いて、静かに地平線に落ちてゆく。夕あかりの中に大きな馬小屋があって、人影も見えて

きた。やっと着いたぞと喜んで行つて見てびっくりである。

今度は少しながらパンの支給があつて、枯草や枯木を燃やしてお湯を沸かしささやかな夕食を済ませる。平坦なところを探して手持ちのテントで天幕を張り、長途の旅の疲れをいやすことにする。しばし時間があつたので、先着隊の人と語ることができた。昨夜、皆、空腹にまかせてたくさん自生しているアカザを採取して飯盒でゆでて食べたとのこと、そして全員、アカザの中毒を起こして吐いたり、下したり、発熱したり、余り立って動ける人もないくらいぐたびれ果てている姿にびっくりした次第で、どんなに腹がすいていても変な雑草は食べてはいけないものだ、これから戒めとしなければと心に誓つたことであつた。

遠い故郷ではこんな荒野の果てで我々の苦闘を知る由もあるまいが、野を渡る風の音、虫の声、雲間にでてし月の光、鳥の声、夜空を渡っている鳥の名は何であらうか、蛙声、やっと落ちついて戦友と語るのは故郷の話。

携帯天幕とは、一平方メートルに三十センチの棒がついたもので六人分で一天幕となる。暗くて狭くて、大きな兵隊が足を伸ばしてやっと寝るだけの粗末なもので、薄い外套を敷き、上衣を胸や腹にかけて疲れた体を横たえてみる。連日の疲れと空腹で、皆、ぐっすり寝込んでしまった。

さて、幾時間眠つたことであらうか、十二時ごろかとも思うころ、余りの騒々しさにびっくりして目を覚ます。驚いたことに着ている物、背も腹も水びたし、外はザーザー雨の音。天幕の中は水びたしで寝ていられる状態ではない。何ということであらう、朝は早くから、谷地坊主を飛び越え飛び越え歩く、余り休むこともなく歩き続けた幾十里。シベリアの大地の広さよ、道の遠さよ、歩けども歩けども、点と見ゆるところまで歩いて行つてもまたその先は遠いのである。

目的地は果してどこなのか、全く見当がつかない。わずかばかりの水筒のお茶は空っぽになり、炎天の中を汗を流し、汗が塩昆布のようにこびりつき、最早水分が体内になくなったのではないかと思えるほど、力

を出して歩くのである。足が疲れてもう歩くのは嫌である。だけど戦友について行かねばならない。無意識になつてこんな遠いところまで歩いて来たのに、天のいたずらか、何たることぞ、シベリアの雨は冷たい、そして夜十二時を過ぎると、また気温がぐうっと下がらしくて、やたらと寒くなってくる。

着がえはないし、たった一枚きりの軍衣袴はぐしょぐしょのずぶ濡れになつて、外は雨、天幕の中は深い水びたし、座することもならず、寝ることもならず、一つきりの背嚢を置く場所もなく、低い天幕の中で装具を膝の上に乗せたまま腰をかがめて、疲れた体、寒い夜、全身干すよしもない濡れ着物を着て、まんじりともせずに夜を明かすとは何と辛いことであろうか。

天幕の中を川のように水が流れる。しゃがんでいるのもつらいので、飯盒に腰をおろすといつても力を入れると壊れそう。天幕の天井は腰をおろして頭が少し残るくらいで、余り背伸びもできない。首を縮めて、しゃがむようにして腰をおろす。余り動くと戦友とぶつかつてしまう狭さ。音立てて降る雨の激しさに天幕

の合間からポタリ、ポタリ、雨雫が落ちてくる。風があるのか、天幕の裾から草原を渡る風の音がしきりと聞こえてくる。雨の音と風の音に混じつてうれしそうな蛙の声、ごころの湿地には蛙が多いのもあろうか。

大陸の夜明けは三時半か四時ごろであらうに、眠れぬ夜をぬれねずみとなつて寒さの中で夜を明かすとは何と辛く長い夜であつたことか。

雨もどうやらやんで、小降りとなつたので皆で天幕を片づけ、濡れた着物を干し、そこらを流れる小川で顔を洗い、曲がっておかしくなつた首や腰を動かして伸ばしてみる。霧が晴れて爽やかな初夏の風が吹き、雨に洗われた四方の景色が緑色が鮮やかに美しかった。先着隊の兵隊たちは、きょうまだ気分がすぐれなくて立てない人もあり気の毒であつた。けれども我々の小隊には一人の落伍者もなく、皆よく頑張ってくれたと感心する。

よほど大きな雨であつたのであろう凹地は池になつているし、道路はぬかるみになつているし、驚だか、

鳴だか、水鳥たちが心地よさそうに池の面を泳いで餌を取っている。晴れていく雲間には、トンビか、カラスが無数に飛んで行く。

昨夜は思いがけない天幕の中の大雨にこの世の出来事とは思えない辛い思いをして、眠ることもできなくて、体力、気力もしぼんでしまいそうな皆ではあっても、顔を洗い、体操をして、爽やかな朝風に吹かれて、心も晴れやかになった。

先着隊のドームから朝食と味噌汁を取りにくるようにとの達しがあつて、皆、喜び勇んで飯盒を集めて持っていく、黒パンとスープをもらってくる。ナホトカを出てより、まともな食事もできなくて、久方ぶりに、スープとは名ばかりであっても野菜が入っており、また濃い、おいしい朝食をいただくことができた。

晴れた空はまことに美しく、夕べの出来事はまるで嘘のようなよいお天気となる。でも収容所の周りの道路が水びたしになっていたので、スコップを持ち出して溝を堀り、道路の修理に汗を流す。大陸は風が強いので、ずぶ濡れになった背囊も軍衣袴もすっかりきれ

いに乾いてくれた。仕事も一段落したので少し早めの昼食となった。昼食が済むと休む間もなく出発命令である。

やっと乾いた背囊を背負い、飯盒を腰につるし、水筒を肩にかけると、さあ出発である。道とはいっても、人通りも車の通りもいよいよ少なくなつてゆくため道の両側の草は繁るにまかせ、わだちの跡だけ草が切れて、道とは名ばかりの草ぼうぼうの道が果てしなく続くのである。

昨日、駅をおりたころは、ところどころ畑もあつて、南瓜があり、馬鈴薯畑があり、キャベツ畑があつたりしたものだけれども、ここらには人家もなければ畑もなく、あるものはただ広い広い大草原ばかりである。日は高く輝いており、歩いている中だんだん暑くなってくる。行けども行けども何も家らしいものはなく、遠い道を一生懸命歩く。幾度か休憩し、水筒のお茶も飲み干し、出る汗も出つくして夕風が涼しくなつた頃、厳かに夕日は西の空に沈んでゆく。谷地坊主につまづき、ぬかるみに足を取られ、水たまりを飛び越え飛び

越えて、もう午後の日を幾時間歩いたことであらうか、どこまで行ったら目的地の家が見つかるのであらうか。体の中の水分も昼食べた黒パンのかけらもなく、腹の中は空っぽになり、もう力尽きて歩く元気もない。地平線に夕日が沈むや、やがてあたりは暗くなってしまった。「日暮れて道尚遠し」と誰か言っていたけれども、暮れてしまった大草原の中で「カマンジル」と「カンボーイ」の道案内で、暮れてしまった夜の道を、疲れ切った足を、痛む足をひきずって、皆、歯を食いしばって歩いた。

暮れてからも最早どれほど歩いたことか、満天の星が美しく、虫の音が賑やかである。暗い中を歩くうち、大分目が馴れてきたようだ。戦友にはぐれないように必死で歩いた。遠くのほうで小さい灯が見えてきた。皆がワーッと声を上げて元氣百倍して歩度を早める。草原の家の灯が見えてからもなかなか遠くて到着できなかったけれども、焚き火を焚いている人の姿が見えるようになってやっと家に着いた。うれしかった。

「お世話になります」

「苦勞さんでした。お疲れでした」

先着隊の人から優しい言葉をかけられて小さな葉ぶき小屋に案内されて、装具をおろし、柔らかな乾草の上に座ることができた。余りのうれしさにぼつりと一粒涙がこぼれてきた。

井戸があるとのこと、井戸へ行き顔を洗い、手を洗いで、さて食事分配である。飯盒を出して分配を終わら「いただきます」と言って箸を取った。毎日黒パンとお茶ばかりで済ましていたのに、何とここでは米の飯が分配されているではないか、キュウリの漬物、キャベツの塩漬と燕麦のスープ、久しぶりに大そうなご馳走にびっくりして、うれし涙にむせびながら米の飯をご馳走になった。

幾日ぶりに暖かい薫り高い乾草に足を長く伸ばし、背を十分つけて寝られる。何とうれしいことであらう。お隣は久保さん、井上さん、西さん、牧さん、藤原さん等々である。ただ低い掘立小屋の中の土の上に乾草を敷いただけの粗末な寝床であるが、堅い汽車の中、土の上と、まともな寝床で幾日も寝たことがないので、

柔らかい乾草の上で寝られることは何よりもうれしかった。

米のご飯も満州以来口にすることはなく、本当においしかった。キュウリもキャベツも大変おいしかった。炊事のおじさんありがとう。今夜はぐっすり眠れそうである。

戦友たちが我々のために炎天で刈り取った草をよく乾かして持ってきてくれた。取り立ての薫り高い柔らかい乾草である。乾草の香が小屋に立ち込めて、疲れ切った五体を深い眠りにさそった。

草刈り

太陽が西に沈むのが夜の十時である。暮れてから歩いたのが二時間くらいであつたろうか、昨夜この収容所に着いたのが十二時であつたとすれば、自分の寢床に案内され、装具をおろし、顔を洗い手を洗い、食事を済ませ、食器を片づけてやすんだのは最早一時か一時半であつたろうに、太陽が出るのが四時だとして、起床が六時であつても幾時間も寝る間はなし、まして一時間は不寝番に起こされるのだ。でも、炊事の人は

ちはおれたちよりも一時間も二時間も早く起きて朝食をつくらねばならないことは、我々より睡眠を取ってられないということ。我々のためにおいしい食事をつくって下さることに深く感謝しなければと思う。

久しぶりぐっすり眠れて「起床」の声に飛び起きる。そして井戸に行つて洗面をする。ここは立派な井戸があるので冷たい水で顔を洗うと、体中がしゃきつて、一日中がうれしい。

ここらで初めて、一夜を明かしたのは昭和二十三年六月二十一日ごろではなかったかと思う。昨夜は暗くて何もわからなかったけれども、家は掘立小屋の、なまこのようなというか、いたちのようなというか、小屋であり、床はない。土間にただ乾草を敷いてあるだけである。装具といつても背囊と雑囊と飯盒、水筒、ただこれだけの所持品である。幸いナホトカで拾ってきた粗末な鉢が一つ雑囊に入れてあるのみ。

全員外に出て体操が始まっていた。体操が済んで朝食を済ませると、全員集合の声が聞こえるので戸外に出てみる。やがて作業開始とのこと。一人一人に大鎌

と砥石が渡されて、水筒一つにお茶を一杯もらい、大鎌を担いで掘立小屋という兵舎でもある収容所を出発する。

小屋という我が城、大切な住居である。ラーゲルというか、ラーゲルの前の小さい坂をおりると小さい小川が流れている。川には小さい木の橋、丸木橋がかかっている。橋を渡ると大草原が果てしなく広がり、小さい道が真っ直ぐに伸びている。一キロか二キロくらい歩いたころ、皆とまって「カマンジル」から鎌の研ぎ方、鎌の持ち方、草の切り方等を一応教わって、全員といっても半分くらい、五十名くらいの者が草刈りを始めた。農家に生まれて牛馬を飼う者は毎日草刈りはしているが、こんな大鎌で草刈りをするのは初めてである。鎌の大きいこと、重たいこと、皆、思い通りに草刈りを始めたものの、何とちっとも切れなくて息が切れるばかり。腕に腰に足に満身の力を込めて、一心不乱に炎天の中を生まれて初めての太鎌の草刈り。大鎌を手にして大草原に向かってノルマ。馴れない手にはマメが出るし、力を抜けば草は切れない、腕は抜

けるほど痛むし、腰も痛い。炎天の太陽はかんかん照りつけるし、汗は出る、喉は乾く、疲れが激しくて泣きたくなる。また、馴れない草刈りで、うまく刈れないのは当然なのに、「カマンジル」のボイストラ、ボイストラ、ダワイ、ダワイ、ニイハラシヨの罵声を聞けば涙がこぼれそうだ。果して草刈りのノルマが完遂できるほど、上手に刈ることができるのであるうかおぼつかない。玉なす汗を拭きやもあらず、全員太鎌との戦いは始まった。

初めの中はなかなか上手には刈れなかったけれども、一時間は過ぎ、二時間は過ぎた。皆、必死に刈ってゆくうち、どうやら右から左にさっと体をひねり鎌を振ると、サーッサーッと左一か所にきれいに草が集まり、どうやら上手に刈れるようになった。

百メートル、二百メートル、千メートル、大草原の草刈りは大変広く刈り進んでいっても、大陸のほんの一角でしかないものであろうか、当てどもなく果てしなく広いのに驚く。

幾度か炎天の草の上に腰をおろして休憩を取って、

高い空を仰いで見る。赤トンボが無心に飛び、雀たちも騒ぎながら大空をよぎって行く。

腹もすいた、喉も乾いた、草刈りも大分要領よく刈れるようになった。一列に横に並んだ兵隊の後に刈り倒された青い草がきれいに並んで乾いてゆく。百メートル、二百メートル、千メートル、働く者には大変な作業でも、見ている者に取っては壮観であり、美しい作業風景である。最も広いところは、トラクターのバリカンの草刈りである。トラクターが五台、また十台とエンジンの音高らかに走ってゆく。ガラブリ（草集め）トラクターに大きな熊手を引かせて集めてゆく姿、大草原の一大ドラマを見ることができた。

遠くの方で「作業やめ、集合」の声が聞こえてくる。水筒と大鎌を肩に三々五々道路に集まり、家路に着く。きょうは最初の日で家の近くの作業であったので、ドームに帰っての食事となった。倉庫の前で機械を戻して、井戸端に行って顔や手を洗い、昼食である。久方ぶりに家で温かいスープの昼食はうれしく、おいしかった。

午後もまた草刈り作業に日の暮れるまで頑張った。一日ごとに採草地が遠くなる。採草地まで朝早くから歩いて、終日草を刈る。暮れるまで草を刈り、片道四里、五里を歩いて帰ってくるころには真っ暗くなるほどであった。

大鎌の草刈りがあり、トラクターの草刈りあり、「ガラブリ」（草集め）、大山つくり、小山つくり、馬方、いろいろな仕事があった、一月近くたったある日のお昼時、大変遠い草刈り作業中、隣の牧正徳さんが急に腹痛を起こして、唸り出したので、炎天の中であっても乾草を敷いて寝かせて、しばし様子を見ることにした。

昼食用には一食分の黒パンが支給される。皆、飯盒に入れて、腰につるして朝から出かける。炊事係が後から温かいスープを大きな樽に詰めて、大草原の果てから果てまで、一グループ残すことなく配って廻ってくるので、どんな遠いところにおっても炊きたての温かいスープをいただくことができた。ちょうどそのときは、黒パンが切れておって屑パンのまんじゅうの

小さいのが二個支給になっておったけれども、よほどお腹が痛かったのか、スーブを勧めてもパンをやっても、お茶を一口飲んだだけで何も食べてくれなくて、腹痛はつのるばかり、炎天の草原に寝かせておくのも気の毒に思い、スーブの車のおじさん（兵隊）に家へ乗せていってもらった。

早い時には十二時ごろから一時ごろまでには来てくれるスーブの車が、その日はよほど遠くに草刈りに行っていたのであろう、最早二時をとくに過ぎてしまった。仲間の中から病人が出たら気にかかるもんで、一日の作業が終わるやいなや、牧さんのところに飛んでいって腹痛が治ってはいないかと顔をのぞいて尋ねてみたが、一向に腹痛は治まってはいない、額に脂汗をたらして痛そうに唸るのみ。遠い昔自宅で盲腸炎の手術を受けられたことがあるとのこと、最近の馴れない激務のためにどうやら虫業突起炎が再発したものらしい。大変である。いち早く開腹して化膿箇所を切除して腹いっぱい膿が広がるのを防がねばならない。井戸へ行って冷たい水を水筒に入れてきてタオルで巻

き少しでも化膿を防止したいと思い、夕食もそこそこにして、大分熱もあるらしいので頭を冷し、また水筒の水をかえて腹を冷やしてやる。まして牧さんは阿蘇の人とのこと。同県人として特に親しくしてもらい、言葉の懐かしさもあり、話題が同じで話がよく合う。どうしても助けてやらねばならない。

ほとんど一睡もすることなく看病をするうち、短い夏の夜は明けてしまった。今日あたり糧秣受領のトラックが来るとの報を聞いて、本部の収容所に連れて行ってもらい軍医さんに診ていただいたら、まして手術でもできたら回復できるかと思い、小隊長「入江」さんにお願ひしてみたところ、自分にも作業に行かず家に残って本部について行くようにとの命令があり、残って待機したが、遂にトラックは来なかった。一日おいて昼ごろトラックが来たので、お願ひして牧さんに乗せて貰い、出発である。凹凸道の懸路を本部へとひた走った。長い長い時間、体があまり揺れないようにしっかり牧さんを腕に抱き上げて、二時間余りの辛い道のりを頑張った。牧さんもどんなにか辛かったこ

とであらう。

シベリアの夏の日はい。本部に着いたのは明るいうちだったので、医務室のきれいな寝台に寝かせてもらい、軍医先生に牧さんの一部始終を報告して一刻も早い処置をお願いした。大草原の腹痛以来、一睡もできないまま心配に心配を重ねていたので、やっと肩の荷をおろすことができた。

外が明るいといっても早くも午後八時か九時のことであり、本部の収容所の兵隊たちも作業から帰ってきたらしく、夕食の支度に忙しい最中である。自分たちにもうれしい夕食のご馳走があった。軍医さんも衛生兵の人たちも親切で優しい人たちばかりであった。今夜は医務室で看病するからということで、医務室を離れて一般兵舎で夜を明かすことになった。

牧さんのそばについていてやりたいと思っていたても、明るく日は外の兵隊たちと作業に出されたので食糧倉庫の整理の手伝いをしていると、本部から伝令が飛んで来て「早く来るように」とのことで、医務室に何事ならんと走って行ってみてびっくりである。

なんとかして命を取りとめたいばかりに、こんな遠いところまで苦勞して連れて来たのに、私が駆けつけたときは、早、牧さんの命はこと切れていた。故郷の友人、遠い異国で知り合った友人、戦友としてどんなにか頼りに思っていた牧さん、「どうして」「どうして」と心に呼びかける。空は晴れて風は涼しいが、青い空が高くむなしかった。

シベリアではどういふわけか死者は皆解剖をされることになっているらしく、解剖を手伝うようにこのことであった。私と先発隊の人と二人で牧さんについて来ているので、この軍医さんと衛生兵の人たちとで、ポブラの影のある兵舎の庭を借りて準備をする。机を出し、椅子を出し、膿盤の桶ときれいな水を入れた桶と、物足りないシベリアのこと、満足な用意はできないまでも準備万端整い、軍医さんの白衣姿もりりしく解剖は開始された。

天もあわれと思ったのか、強い日差しを少しさえぎって雲が出て陰をつくってくれた。大きな直刀で喉にメスを入れ、次に肋骨七本を鋏でパチン、パチンと

いとも簡単に切ってしまったわね、次は腹部を直刀で大きく切り割ってから、一つ一つ内臓を調べられた。開腹と同時に、多量の膿が机の上に吹き出してこぼれ落ちた。あれほど化膿を心配して腹部を冷し続けてきたのに、最早手おくれであったのか。膿は腸に充満して、生きているのが無理であったのであろう。

昨日まであの遠い採草地まで片道五里、六里と歩いて行って大鎌を振り、幾十ソートの草刈りを続けてきた。草刈りばかりではない。トラクターのバリカンによる草刈り、ガラブリ（草集め）、馬方による草集め、小山づくり、大山づくり、どれ一つとっても楽な仕事はありはしない。シベリアに来てからも数えきれない苦難の日々をなめつくして、日本に無事帰るべくやうとここまで来たものを、尊い人を亡くすとは何と悔しいことであらう。

曇っていた太陽がまた強く照り出して、メスを持たれた軍医先生も、手伝いの兵隊たちも汗が玉のように額をしたり落ちる。悪臭をかぎつけた大きなハエが無数にたかるので、近くにあった向日葵の大きな葉を

団扇代わりに使った。腹の中を水できれいに洗い、内臓を元の位置に納め、縫合針で縫い上げ、肛門と口に固く脱脂綿を詰め、アルコールで体を拭き上げて解剖は終わった。死体安置所に牧さんを寝かせてもらい、兵舎に帰った。

入ソ以来どんなに待ちわびた「東京ダモイ」。ナホトカまでや々と来たというのに、或る人は船に乗って無事日本に帰ったというのに、こんな遠い大草原の果てに連れて来られてあと一ふんばりというとき、腹痛を起こすとは何たることか、家では皆が待っているであらうに、ナホトカからすんなり帰してくれたら腹痛も起こさずに命を落とすこともなかったらうに、惜しい人を亡くしたもんだと悔やまれる今日の日である。

午後もお天気はよくて、かんかん照りの中を、昼食の後、四、五名の人に手伝ってもらって、西の方にある丘の上の墓地に墓堀りに出かける。スコップと鶴嘴を持って、折角こんな遠いところまで牧さんを助けたいばかりに大事に連れてきたものを、墓まで掘らねばならないとは何と残念なことであらうか、悔やみても

悔やみきれない、くやしきである。

医務室に昨夜連れて行ったとき、なんで開腹手術をしてくれなかったのか、手術道具が揃っていなかったのか、軍医さんが内科の人で外科手術ができなかったのか、それとも、輸血、リンゲル、ブドウ糖等々の医療品に乏しくて助ける見込みがなかったのか、解剖するまで腹にさわらなかったのは今思っても不思議である。

現在の日本であるならば、まだ助かる見込みのある中、ラーゲルの医務室に連れて行ったのである。あたし若い命を残念でたまらない。また、私を作業に迫いやらす医務室に看護においてもらえたら、最後の牧さんの言葉を聞いて上げられたのに、何一つ遺言もない。

ラーゲルの西方百メートルほどのところに小高い丘があつて、墓地になつていた。現地には死んだ戦友たちの墓標が新しいのやら古いのやらが十幾柱立ち並んでいる。この大草原でどんな事情で亡くなられたのであろうか。感冒か、怪我か、栄養失調症か、幾度もご苦労されたことを思い、しばし両手を合わせた。

左手の広い場所を見つけて墓を掘ることにした。固い赤土はスコップを受けつけない。一生懸命鶴嘴を使って掘ってみる。スコップで土をはねて、こびりついた赤土を掘り上げる。人丈以上に深く掘る。夏の午後の日は暑いこと、汗が体中から吹き出してくる。服が汚れるので裸ん坊で掘る。深くなると一人で掘るため交替で掘って、やっとお墓を掘り上げることができた。皆にお墓で待ってもらい、ラーゲルまで牧さんの遺体を迎えにいきタンカに乗せてくる。牧さんはすっかり痩せて細くなっているので軽いはずなのに、牧さんを担ぐ足どりは石よりも重く感じられた。暑い夕日を浴びながら、汗びっしょりになって墓地へ担いでいった。

シベリアであらゆる苦勞を重ねて、ソ連の国に多大なる貢献をして、牧さんにはどんな立派な着物を着せてあげてもよいはずなのに、着物一枚着せることもなく、古ぼけた毛布の切れ端にくるんで、犬ころでも捨てるみたいに邪魔者扱いするとは何事であらうか。

いよいよ最後のお別れだ。牧さんを抱き上げて皆で

墓の中におろしてもらい、頭を北に向けて安置する、
やっと深い地底に寝かせることができた。

大きな向日葵や、萩、おみなえし、かるかや、ききょう、なでしこ、月見草、きれいに咲いた野の花を
牧さんの上に乗せて飾った。

「皆さん、いいですから土をかけて上げてください」とお願いして、三丁であったか五丁であったか、スコップでつぎつぎと墓の中に赤い土が音立ててほうり込まれていく。墓が深いので息が切れる。交替で土を入れてやる。どうやら土も入れ終わって、亡くなられたほかの戦友たちのように高く土まんじゅうを盛ってやった。固くスコップでたたき固めて、東正面を向けて「牧正徳君の墓」と新しい墓標を隊長さんに書いてもらったものを建てた。全員、長い黙とうを捧げてささやかな野辺の送りは終わった。

昭和二十三年七月十六日 朝九時 死亡

午後六時 埋葬

大草原の真っ只中の墓地で、だれも詣でる者もなく
今なお淋しく人を待っていられるシベリアの遺霊の

人々。隊長以下十数人葬儀に参列、牧さんの埋葬を手伝っていただいた。真っ赤な太陽を真西に拝むようにして牧さんの墓標に向かう。背の高いポプラ、プラタナス、泥柳の枝で夏蟬がやかましく鳴き交わす。炎天の大草原、萩の花が牧さんの死をいたむかのように深く頭を垂れる。大きな向日葵が幾つも咲き競い、ききょう、おみなえし、野菊の花、なでしこ、月見草等々が美しく咲き揃っていた。長く長く黙とうを捧げていた兵隊たちの目から「滂沱」として涙が流れ落ちてとまらなかった。手伝ってくれた皆さん、本当に入りがとうございました。でも、どうして牧さんを助けることができなかったのであろうか。

大きな、とうもろこしの葉がさらさらと風に鳴っていた。とうもろこしの花が異人さんの髪の毛のように長く紅く畑いっぱい揺れていた。とうもろこしの畑の角にもその近くの庭の角にも、収容所の庭のあちこちにも、墓地のあちこちにも、暑い陽射しにほれたような姿でいっぱい咲いていた。昼間はひまわりや萩、なでしこが牧さんの墓前を飾ってくれるであろう。大

陸の夜は星も月も美しい。月見草は夕方花開くとき音立てて花開くという。

だれも知らないシベリアの墓地の、ひまわりよ、萩よ、ききょうとおみなえしよ、そして夜は淋しいであろう牧さんの墓地を守って忘れることなく幾歳霜、荒野に咲きかわり続けているであろう月見草を思う。

墓前に手折って捧げてきた月見草、向日葵、萩、また今年も美しく咲いてくれたことであろうか。

秋風が吹き、枯れ葉が舞い、また冷たい冬が訪れる。

【執筆者の紹介】

現住所 熊本県本渡市本町大字本七五四三

本籍地 現住所に同じ

生年月日 大正十二年四月二十九日

入 隊 昭和十九年十二月六日

満州独立第十四大隊谷隊根本隊

終戦時の居住地 満州昌圖

入ソ日 昭和二十年十二月六日

抑留地 ウランウデ

作 業 伐採

引 揚 昭和二十三年十一月一日

引揚船 英彦丸

上陸地 舞鶴

(熊本県 高瀬 潤吉)

青春時の抑留

岐阜県 今井 琢郎

昭和二十年八月九日、ソ連と開戦の日、この朝、私は週番下士官として、日朝点呼をとうろくとして兵隊たちに近づいたが、彼らは私に気づかず、しきりにわめき合い、ある者は踊らんばかりに軍歌を放歌して、またある者は大声でわけのわからないことをどなっている。

どうも理解し難い光景に、兵隊の一人に言葉をかけると「日本は米英に無条件で勝ったのであります」と言う。どうも話がうますぎると不安に思っこの話の